

## 分離派建築会の活動を多面的に解明した調査・研究・展覧会

分離派 100 年研究会 殿  
パナソニック汐留美術館 殿  
京都国立近代美術館 殿

分離派建築会（以下「分離派」と略す）は、1920年に東京帝国大学建築学科を卒業した石本喜久治・堀口捨己・山田守・瀧澤眞弓・森田慶一・矢田茂により同年に結成され、その後、蔵田周忠・山口文象・大内秀一郎が加わった建築家グループであり、日本のモダニズム建築を先導した存在として広く知られている。しかし、メンバーそれぞれの業績がよく知られているのに対し、グループとしての活動がどのような実態と特徴を持つかについては、これまで詳しい研究は行われてこなかった。

このような研究状況に対し、建築史・意匠、美術史を専門とする研究者達が、学際的な研究グループである分離派 100 年研究会（以下「研究会」と略す）を組織し、様々な機関に所蔵される資料（図面、模型、写真、文書等）を網羅的に調査するとともに、8 回（報告者 17 名）に及ぶ研究集会、同じく 8 回のシンポジウム（同 32 名）を開催して、分析・考察を進める一方、個別研究の総合化を図った。そしてこれらの活動を基礎に、大部な論考集である田路貴浩編『分離派建築会 日本のモダニズム建築誕生』（京都大学学術出版会、2020 年、全 592 頁）が出版されている。

また、研究会の活動をもとに「分離派建築会 100 年 建築は芸術か？」と題する展覧会が、パナソニック汐留美術館（2020 年 10 月 10 日～12 月 15 日）・京都国立近代美術館（2021 年 1 月 6 日～3 月 7 日）により企画・開催された。同展覧会は、モダニズム建築受容期の展覧会としては日本で初めてのものであり、同時代の芸術作品や歴史も併せて紹介され、専門家にとどまらない多くの一般客の来場を得た。同名のタイトルのもと、展覧会の図録（朝日新聞社、2020 年、全 275 頁）も刊行されている。

この業績において評価すべき点は以下の通りである。

- (1) 様式建築からモダニズムへ移行する近代建築の歴史の中で、意匠を重視する視点が日本で萌芽し成長する過程についてのミッシングリンクを明らかにする活動として、日本の建築界にとって極めて重要な調査・研究活動である。
- (2) 網羅的な資料調査により、分離派の活動実態を客観的に明らかにし、「創作」「田園」「彫刻」「構成」など、分離派を特徴づける概念を抽出して再評価し、今後の研究の基礎を築いた。これは、学際的な研究組織の強みを活かし、分離派に属した個別建築家の研究を総合することによって初めて可能になったものである。
- (3) 研究成果を展覧会というビジュアルな手法で、分離派をより広い文脈の中に位置付けつつ一般に紹介し、分離派の活動の重要性を社会へ知らせた。

以上のように、日本の近代建築黎明期における重要な歴史的活動に対して、学際的な研究グループが大規模な研究を実施して、研究を前進させただけでなく、展覧会を通して研究成果を分かりやすい形で社会へ発信した建築・文化に対する業績として高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。